



72年前、1人の少年が父親に手を引かれ、この川を渡った。

「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」行事 写真展

「東京都東村山市青葉町4丁目 多磨全生園」 —写真家 黒崎彰—

元ハンセン病図書館員 山下道輔氏と多磨全生園 2001～2013

2013年 6/17(月) 13:00～23(日) 17:00 通常開場時間(6/18～22) 10:00～19:00
会期中無休、入場無料、会場：都政ギャラリー 東京都議会議事堂1F(新宿駅西口徒歩10分、都庁前駅すぐ)

主催：東京都 問合せ先：東京都健康安全研究センター広報企画係 電話 03-5937-1089

少年は成長し、今もそこに暮らしている。

元ハンセン病図書館員 山下道輔さん(84)が父親に手を引かれてこの川(表写真:多磨全生園近くの空堀川)を渡り、多磨全生園に向かったのは今から72年前、1941(昭和16)年の太平洋戦争が開戦した年の春のことです。発症した山下さんは、当時の患者の強制収容を嫌い、父親と共に自ら入所しました。その後特効薬が発見され、母親が家財を売払って工面したお金で懸命な治療を行い、命を取り留めたのです。

山下さんは1969(昭和44)年全生園自治会が設立したハンセン病図書館で、ハンセン病に関する文献資料の収集を始めます。山下さんの無私の心と全国の療養所の協力者によって、散逸しかけていた資料が集まるよう



になります。各療養所の自治会機関誌や文芸作品などは入所者が書き残した貴重なもので、山下さんは予算も人手も無い中で古書店をまわり、蔵書家に寄贈を願い出て資料を充実していきます。図書館の仕事は収集だけ

なく、貸出用と保存用の複製、傷んだ書籍や資料の修復、来館者の応対に貸出し業務と多岐にわたりました。

山下さんは資料を大切に収集保存することはもちろん、いかに活用するかを、利用者第一に考えました。そのような山下さんの活動と図書館の存在が知られるようになり、資料は研究者や学生、一般市民にも広く活用され、その後のハンセン病に対する正しい知識の普及啓発と偏見・差別の解消、元患者とその家族の名誉回復に大きな役割を果たしていきます。

2008(平成20)年、惜しまれつつハンセン病図書館は閉館し、山下さんの40年続いた図書館と宿舎を往復する毎日が終わりました。

集められた貴重な資料は現在の国立ハンセン病資料館に引継がれています。



全てをつくり上げたのは彼らだった。

現在の多磨全生園は、地域の人々が散歩やランニングに訪れ、夕暮れまで子どもたちが走り回っています。四季折々の草花が来園者を迎える、特に桜は見事で花見の季節は人であふれます。この広大な緑に囲まれて病棟や入所者の暮らす平屋建ての宿舎が点在し、スーパーや飲食店、床屋があります。ちょっと変わっているのが、キリスト教や仏教など様々な宗派の建物が隣り合う宗教地区。以前は学校もありました。そして今も納骨堂には故郷に帰れない人々の御靈が眠ります。

この森は武蔵野の森が残されたように見えますが、自然の森ではありません。古い写真には殺風景な景色に宿舎が点在する様子を見ることができます。戦時中のハンセン病療養所では、食料自給のために開墾され、



燃料や防空壕の材料として木々は切り倒されました。戦中戦後の食料難の時代には多くの栄養失調による死者を出しました。

戦後少しづつ余裕が出てくると、入所者は木を植え始めます。ここで暮らすしかなかった人々が、実家の庭や故郷の山河の木々を想いながら、また、結婚しても子を持つことが許されなかつた者が我が子のように慈しみ育てた木々が森となつたのです。

1979(昭和54)年、全生園70年史に当時の自治会会长松本馨氏は「私たちが地上を去る時、センターと森が残るであろう。」という言葉を残しています。松本氏と氏を支えた入所者たちは社会から絶望的な差別と苦痛を受けながら、お世話になった地域の人々に森を残すことを決めました。現在、入所者の平均年齢は80歳を超えています。



「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」行事 開催にあたって

東京都では、ハンセン病について多くの方に理解していただくため、6月22日の「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」にあわせ写真展を企画いたしました。

今回展示する写真展の舞台である国立ハンセン病療養所「多磨全生園」は、東京都東村山市にあり、全国に13ある国立ハンセン病療養所の中でも中心的な存在です。

ハンセン病はかつて「らい病」と呼ばれた、感染力の極めて弱い病原菌による感染症の一つです。ハンセン病を発病すると、末梢神経や皮膚が冒され、知覚障害が起こるほか、外見上特徴的な障害が生じることがあります。

日本においては、明治時代に欧米諸国との対抗から富国強兵の政策をとる中で、ハンセン病の療養所をつくり全ての患者を終生療養所に隔離する政策をとりました。そのために、家族が別れさせられるという不幸だけではなく、恐ろしい病気が家族に生じたということで、人々からより強い偏見や差別を受けることになりました。

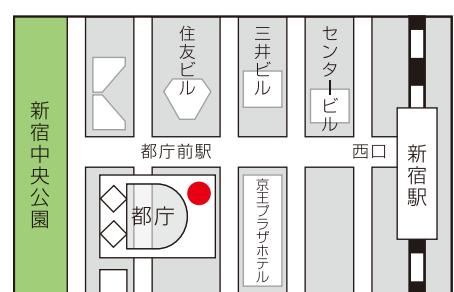
永らく不治の病であったハンセン病は、1940年代に特効薬が発見され、症状は劇的に改善しました。しかし、日本においては特効薬ができるからも隔離政策が続けられたことから、多くの患者は症状が回復したにも

関わらず、療養所から出ることはほとんどできませんでした。

ハンセン病患者に対する誤った施設入所政策が、多くの患者や家族の人権に対して大きな制限、制約になったこと、また一般社会で極めて厳しい偏見や差別があった事実を私達は深刻に受け止め、一人ひとりがハンセン病について正しい知識を得て、理解して欲しいと願っております。

どうぞゆっくりご覧になっていただき、みなさまの心に少しでも触れるものがあれば幸いです。

最後に、本写真展を開催するに当たり、写真家の黒崎彰氏や貴重な資料等をお貸しくださった国立ハンセン病資料館・多磨全生園の関係者のみなさまに對し、心から御礼を申し上げます。



会場地図：都政ギャラリー 東京都議会議事堂1F